百々裏話（14）

おもてあきら

俊寛（ワキ一声について）

俊寛は今日ではかなりひんぱんに演じられるようであるが、昔はさほど人気のあった曲ではないらしい。試みに能楽源流考の「演能曲目調査資料」を開いて見ると、天文十三年二月十日と翌々日に、宮王大夫が薪能で演じているだけで、他に記録が無い。十二日に再び俊寛を演じたのは特に乞われたからであり（多聞院日記）、宮王は俊寛が得意であったらしい。あまり演じられなかつた為か、俊寛の古写謡本も数が少ない。管見では、天正・慶長の頃に活躍した金春流の下間少進自筆本が最も古い内容を伝えたものと思われる。この本は曲名が「法勝寺執行」となつており、俊寛にはそのような別名があつたらしい。奥書には「宮王道三自筆之本同節等写之畢　法印仲孝」とある。宮王道三は金春の別家筋の大夫であり、前述の薪能の際の演者である。この本のワキ一声が現在のシテ方五流の文句と全く異なり、下懸り宝生（脇宝生）流の詞章がそれと一致していることから、俊寛のワキ一声を調べてみたところ、古今諸流にわたつて次のような多くの異同があつた。

イ　早舟の心にかなふ追手にて、舟子やいとど勇むらん（観世・宝生）

ロ　早舟の心にかなふ追手の風、舟子やいとど勇むらん（慶長以前の観世）

ハ　早舟の心にかなふ追手の風に、舟子やいとど勇むらん（江戸時代の金春）

ニ　船出する心にかなふ追手にて、舟子やいとど勇むらん（金春）

ホ　長閑なる追手に船の帆を引きて、舟子やなほも勇むらん（金剛）

ヘ　長閑なる追手に船の帆を揚げて、舟子やなほも勇むらん（喜多）

ト　ワキ一声ナシ（車屋本、同系の版本）

チ　船出するゆくへいつくと白浪に、浮かぶ追手のほどもなく、はやく鬼界が島ならん（下宝生・宮王本・下懸り江戸期版本）

先ず観世から見てゆくと、慶長頃までは**ロ**であつたのを、十代の観世大夫暮閑（黒雪）が**イ**に改めたらしい。天理図書館所蔵の室町末期筆写本や慶長年間に出版された光悦謡本・玉屋本が「追手の風」となつていて**ロ**であるが元和卯月本以後の観世流版本や、観世座付ワキ方進藤流の江戸初期の版本は、みな「追手にて」とあつて**イ**である。観世黒雪に謡を習つた豊島作右衛門なる人物の所持していた写本（鴻山文庫蔵）をみると、「追手の風」と書写してあつたのを「追手にて」と訂正してあり、元和頃にこの一句が改訂されたことを物語つている。宝生流が現在の観世と同じく**イ**であるのは、江戸初期以降に観世の影響を蒙つたものと思われ、室町期の上懸りの謡い方が**ロ**であつたことは、およそ間違いあるまい。

さて、厄介なのは下懸り諸流である。現行金春流は**ニ**で、**イ**と比較すると初五が「船出する」と変つているだけであるが、これは昔からの文句ではないらしく、現在の金春流謡本の祖本である貞享三年六徳本は**ハ**であり、**ロ**に最も近い。この形は江戸初期の金春流写本にも見られ（例えば、鴻山文庫の慶安頃書写了随本、寛永頃の東大寺本など）、**ハ**が金春流の普通の形ではなかつたかと思われる。金剛流と喜多流はともに俊寛に古写本が無いので、いつから現在の形になつたのか明らかでない。ただ喜多流の場合は、同流は江戸時代には俊寛を演じていなかつたようで、俊寛が新たに現行曲として組入れられたのは明治になつてからである（曲名は鬼界が島）から、**ヘ**は**ホ**（金剛）をもとにして改めたものと推定される。

一番文句の違つているのが**チ**であるが、前述の下間少進自筆本（宮王本）がそうなのであるから、かなり古くからの謡い方に違いない。下懸り宝生流が同じく**チ**であることは既に述べたが、これは同流がかなり正しく古風を伝承している事実を示すかも知れない。江戸時代の下懸り版本では、宝永二年宣風坊刊行外組枕本・宝永八年戸倉屋外組本の二種が**チ**であり、この謡い方も江戸期にはかなり行われていたらしい。但し注意を要するのは、**チ**の本文を伝える宮王本・江戸期版本・下宝生の三者が、ともに金春流の正系ではないことである。宮王は金春座から分かれた家であるが、道三の時代には、時に金剛の助力をする

など、ほとんど独立していたのであり、四座役者目録によると、宮王座は「ワガ侭ニ謡イ大キニ替ル」点があったらしい。又宜風坊本も戸倉屋本も、下懸りの謡本ではあるが、何流ともつかぬ正体不明の本であり、金春正本と思われる六徳本とは相違が甚しい。下宝生は金春座付のワキ方であった春藤流から分離した流儀であるが、その春藤も古くからの金春座付であったわけではなく、流祖春藤六右衛門は金剛座のワキ師金剛又兵衛をまねた点が多かったらしい(四座役者目録)。従つて、チよりはハの方を金春の正系と考えるべきかと思うが、金春流が必らずしも下懸りの正しい古形を伝えているとは限らないことは、改めて言うまでもないことであろう。

ところで、下懸りの俊寛のワキ一声が甚しく相違するのは、かつてワキ一声の無い演出が存在したことに影響されているらしい。天正・慶長頃の下懸り謡本として有名な車屋本(野上本・吉川小本・毛利本)や、それと同系の江戸初期の写本には、ワキ一声が記載されておらず、一声を謡わぬ演出が古くからあつたらしい。ワキ高安流の伝書たる「鶴永集」に当流謡ニハワキノ一声ハナシ　能ノトキニハ唄。玄昌(高安流の三代。江戸中期の人)ノ時分ハ脇付ナシ

とあるから、高安流では昔は一声を謡わないのが普通であつたようである。又、嘉永頃筆写の狂言大蔵流八右衛門派の間狂言伝書に、

「……今こそ限りなりけれ」此諷過テ一セイニナリ舟ヲ出ス。又一セイナク脇出ル事モアリ。其時ハ諷ニ掛ケテ舟ヲ出ス。

とあるのを見ると、江戸後期までその演出が残つていたことが知られる。車屋本・高安流・大蔵流ともに下懸りの資料であり、観世流関係の資料にはこのような記事が見当らないから、これは下懸りのみに伝わつた演出であると考えるべきであろう。昔は謡うとは限らなかつた一声を、後になつて謡うのが普通になつたため、ある流儀は上懸りの文句をそのまま借用し、ある流では別の一声を創作したりしたことが、下懸りの俊寛ワキ一声に相違が多いことの最大の原因なのではなかろうか。どうもそれ以外の理由が思い浮かばない。

ワキ一声の後、間狂言が和泉流の場合には「人は勇めど我はまた、鬼界が島は恐ろしや」と、狂言方の舟子が二の句を謡う。これは「舟子やいとど(なほも)勇むらん」という一声の文句に対応した滑稽な文句であつて、チの下宝生のワキの文句とは対応しない。ワキ下宝生、狂言和泉流で演ずる際にはどうするのであろう。狂言が二の句を謡うのは和泉流だけで、大蔵流や鷺流では謡わぬらしい。七騎落の「立つ浪風の音迄もときの声かや恐ろしや」などを真似て、和泉流が考え出した新演出かも知れないが、江戸中期には既に行われていたようである。

(33・4・1)



